

はじめに

2003年10月、社会資本（ソーシャル・キャピタル）論で著名なハーバード大学教授ロバート・パットナムもよく知る同大学コンピュータサイエンス専攻の学生マーク・ザッカーバーグは、学内の女子学生の人気度をネット上でカウントできる「フェイスマッシュ」を立ち上げ、一夜にしてその名は学内に知れ渡ることとなった。学友間の「ネット上の大学社交場」は、その後、「友達の友達」を越えて誰とでもネット上でつながる「フェイスブック」として世界中に広がり、今や SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）は当たり前ものとなった。

Windows95の登場によって身近になったインターネットについてパットナムは、2000年に出版された『孤独なボウリング』（*Bowling Alone*）のなかで、「インターネットは主として能動的な、社会的コミュニケーション手段になるだろうか。それとも受動的な、プライベートな娯楽手段になるのだろうか」と問いかけ、社会学者バリー・ウェルマンらの学術研究者によるコンピュータ・コミュニケーションの利用に関する研究を引き合いに出し、「インターネット上の頻繁な接触は、対面での頻繁な接触を補完するものであって、それにとって代わるものではない」との予測を披瀝した。

『孤独なボウリング』出版以降のフェイスブック等 SNS の普及は、「対面での頻繁な接触」を最初からすっ飛ばし、個人がその属性とは無関係に国境を越えて偏見や憎悪で結びつき、団結することさえ容易にした。21世紀の政治は、これら負の社会的亀裂、あるいは新たなライフスタイルをノードとする「飛び地」的サイバー・ポリティクスに大きく揺さぶられ続けるであろう。

ポスト工業社会化、グローバル化、ネット化が生み出す現代という「複雑な時代」において、旧来のパワー、イデオロギー、アイデンティティのあり方は大きく変わろうとしている。この時代の先にある国家・政治・企業・市民社会の新たな結びつきの構図を探索する「未来への航海」途上には、新たな装いをしたエリート主義、「ピープル」がもつ同調性が過剰に取り込まれたポピュリ

ズム、古い抑圧＝攻撃仮説に先祖返りした新しい暴力、盗賊支配と組織犯罪の共犯政治など難問が山積している。

パットナムの同僚であるシーダ・スコッチポルは、2003年に出版した『失われた民主主義』(*Diminished Democracy*)において、アメリカではとくに1970年代以降、それまでに全米に草の根的にみられた連邦型構造をもつ全国規模のメンバーシップ団体が弱体化し、国民全体に関わるような重大な公的問題への一般市民の参加の機会や構造が劣化している、と主張した。

その一因として彼女は、メディアやEメールが特定のメッセージを特定の層に的を絞って届けることができるようになったことを挙げている。高学歴化とネット社会化が生み出したメディア・プロが運営するこの種のトップダウン的ターゲティング手法は、社会的アイデンティティを断片化し、また公的討論での一般市民の生活からすれば些末な論点をめぐる分裂に議論を安住させることを助長することになった。討論への実質的な参加者は、狭い範囲の「招待客」のみで、多様な社会的ネットワークによる選挙過程や利益集団への幅広い包摂的な参加を駆逐した。スコッチポルによれば世論調査までもが特定の感情・言葉・フレーズを意図的に配することを通して、所定の政策目標追求への支持を増大しうる「精巧につくられたトーク」(*crafted talk*)になり下がった、と批判は厳しい。

多かれ少なかれこうした時代に生きている私たちは、知識の非体系性・非包括性・非順次性を特徴とする「常識知」を、知識の体系性・包括性・順次性を属性とする専門知に突き合わせ、両者を対話させるなかから、自らを社会の単なるエージェント(agent)から、「常識知」を社会・国家へと媒介する(intermediate)市民的パワーデッキの創出力、さらには社会体を貫いている複数性と相違性、多様性と異種性の現れの間としての「政治」を批判的に分析する力を身につけていく必要がある。本書がその一助になれば幸いである。